

木の言い分 ③

■木々の声に耳をかたむけて

知ってましたか？ひとたび根を張れば、自分で移動することが出来ず、異常を訴える声をもたない植物も、外圧に対して極めてダイナミックに防衛、防御体制をとる事を。

例えば、食葉害虫に葉をかじられるとすぐさま虫のいやがるタンニンなどの物質を出し葉を不味くすると共に緑の細胞をコルク化したりします。同時に害虫が発生したことを他の樹木に伝達する物質を発生させ、それを感じた樹木も同様に葉を不味くしてしまいます。病原菌に対しても寄生されればその周りの細胞が死んで菌の養分吸収を抑止し、侵入部の細胞にリグニンが沈着、木化して硬い壁を作り拡大を防ぐなど、植物の敵とのバトルもなかなか熾烈です。

植生調査などをしているとたびたび感じることは「植物にはかなわない」ということです。インターチェンジ横の劣悪な環境においてあきらかに生長が阻害されているコブシなどですらヒトの最大の身長をはるかに超えます。寿命からいっても長命なものはヒトを何代にもわたって見守ることになります。（あたりまえのことですか？）

ただ自分で移動できないから、声を発しないから、ヒトに対してほとんど抵抗しないから、という理由で植物をないがしろに扱うのはいかがなものでしょうか。公園とか屋上緑化などでまるで植物を装置、消耗品のように扱っているようにみえることがあります。弱ったもの、枯れたものは新しく植え替えればいい、という意識がみえたりすると、本来の目的と手段との乖離に居心地の悪い思いがします。

3月15日の環境緑化新聞には「害路樹」なる言葉が見出しに登場しています。植物に無縁の業者による見境のない強剪定により、街路樹は本来の樹形とは程遠い無残な姿を街のあちこちでさらしています。自治体の予算、人材不足など諸々の理由でやむを得ない部分はあるにしろ、もう少し植物の声無き声に耳をかたむけるべきではないでしょうか。

ここで皆さんに1冊の本を紹介したいと思います。

『森が動く』井上征人著（歴史春秋社）です。平易な文章ですぐ読み終わられる童話のような話ですが、植物界でもヒトに逆襲しようという急先鋒がいたりして、花粉症などその一手ではないか、などと思えたりします。本当のところ、植物はヒトなど一過性の性質の悪い邪魔者くらいにしか位置付けてないのかもしれませんが……。機会があれば読んでみてください。